

自閉スペクトラム症傾向の特徴を有する人々における攻撃行動の喚起とその抑制プログラムの検討

山脇望美

メディアなどの媒体は、特異的な犯罪が起きると発達障害、特に自閉スペクトラム症と事件を関連づけるニュースを報道することがある。これは、発達障害が直接の要因でないとしても、少なくとも事件との「間接的な要因」になっているとの認識が暗黙裡にあるためである。実際に、多くの先行研究においても、自閉スペクトラム症の特徴を強く有する人々は、攻撃行動が出現しやすいと指摘されてきた。しかし、その一方で、自閉スペクトラム症の特徴を強く有する人々における攻撃行動は、決して出現しやすいわけではないとの指摘もある。こうした動向の中、少年院では、平成 27 年の少年院法改正により、発達障害の診断を受けていないがその疑いのある少年に対応する支援教育課程が設けられ、対人関係スキルの習得など集団適応のための支援が行われている。上記のような現状では、少年院教育においても、攻撃行動を引き起こす要因に着目したプログラムが必要となるであろう。

本研究では、自閉スペクトラム症の特徴を強く有する人の攻撃行動の発生についての回答を提供するために、まず、(a) 自閉スペクトラム症傾向における攻撃行動の発生プロセスについて検討した。そして、攻撃行動を発生させる要因に着目したプログラムを開発するために、(a) の研究結果に基づいて (b) 自閉スペクトラム症傾向における攻撃行動を抑制する心理教育的プログラムを作成し、その効果を検討した。

第 2 章 (研究 1) では、顕在的攻撃性と潜在的攻撃性が攻撃行動を予測するという仮説を立て、実験室実験により、大学生 71 名を対象に検討した。攻撃行動を従属変数とする階層的重回帰分析分析を実施した結果、顕在的攻撃性は挑発の有無に関係なく攻撃行動を予測しなかった。これに対して、潜在的攻撃性は攻撃行動を予測し、これは、挑発を受けるか受けないかとは無関係だった。これらの結果は、攻撃性の潜在的測度が攻撃行動の予測に有効であることを示す。しかし、顕在的攻撃性は、測定状況の影響を受けやすいことから、顕在的攻撃性が攻撃行動を予測するツールでないとは言い切れないという限界があった。

第 3 章 (研究 2) では、大学生を対象にアレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向が顕在的攻撃性および潜在的攻撃性と関連することにより攻撃行動を高める

のかについて検討した。参加者は大学生 208 名であった。相関分析の結果、自閉スペクトラム症傾向のすべての下位尺度は、アレキシサイミア傾向と関連があった。共分散構造分析の結果、注意の切り替えの困難さと細部への注意は、顕在的攻撃性と関連することにより、攻撃行動と正の関連が示された。また、コミュニケーションの乏しさは直接的に攻撃行動と正の関連がみられ、社会的スキルの乏しさは、直接的に攻撃行動と負の関連がみられた。しかし、想像力の乏しさは、両攻撃性や攻撃行動と関連がみられなかった。したがって、自閉スペクトラム症傾向と攻撃行動の関連においては、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症の特徴に着目し、攻撃行動との関連を検討する必要があるといえる。また、攻撃性の測定に関しては、顕在的攻撃性が本研究においては頑健なツールであると示されたため、引き続きの研究において使用した。

第 4 章（研究 3）においては、非行少年を対象として、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向が顕在的攻撃性と関連することにより粗暴行為を高めるのかについて検討した。参加者は、非行少年 257 名であった。相関分析の結果、コミュニケーションスキルの乏しさは、顕在的攻撃性を高めて粗暴行為を増大させ、想像力の乏しさは、直接的に粗暴行為を増大させることが示された。一方で、社会的スキルの乏しさと注意の切り替えの乏しさ、細部への注意の没頭は、顕在的攻撃性や粗暴行為と関連が示されなかった。ゆえに、非行少年の自閉スペクトラム症傾向と粗暴行為について検討する際にも、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向の特徴と粗暴行為との関連を検討する必要があると考えられた。したがって、研究 2 と研究 3 より、従来の研究において統一した見解が見出されなかったのは、自閉スペクトラム症の診断の有無により攻撃行動の発現を判断していたことが一因となっていると考えられた。

第 5 章（研究 4）では、第 3 章と第 4 章に基づいて、非行少年を対象として、感情学習プログラムの開発とその効果を検討した。非行少年 80 名を対象としてプログラムの効果について検討した結果、アレキシサイミア傾向に該当する非行少年や自閉スペクトラム症傾向とアレキシサイミア傾向に該当する非行少年において、アレキシサイミア傾向の得点、攻撃性の得点が有意に低下した。そのため、感情学習プログラムは、アレキシサイミア傾向に該当する非行少年や自閉スペクトラム症傾向とアレキシサイミア傾向に該当する非行少年において効果的なプログラムと考えられた。

第 6 章の総括的討論では、これらの研究結果を総括した上で、攻撃性の顕在的な自己概念に着目し、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向の特徴が攻撃性を増大させ、攻撃行動に至ると結論づけた。そして、感情学習プログラムを実施することに

より、自分自身や他者の本来の意図を適切に理解することができた結果、攻撃行動を抑制できることについてまとめた。自閉スペクトラム症傾向者における攻撃行動の派生メカニズムについて検討した研究はほとんどないが、本研究は、自閉スペクトラム症傾向の特徴と攻撃行動に関する汎用性の高い研究知見といえる。犯罪者や非行少年の中には、自閉スペクトラム症の特徴を強く有する人々が一定数存在するが、自閉スペクトラム症の特徴を有するために罪を犯すわけではなく、アレキシサイミア傾向の特徴を一定程度持っていることや、それに伴って攻撃性に関連することが、非行・犯罪の発現と関係していると筆者は考える。